

映画『殺人の追憶』にみられる韓国映画の新たな段階

経営学部
丸谷雄一郎

『殺人の追憶』は2003年の韓国興業収入第1位を記録し、大鐘賞（韓国アカデミー賞）の作品賞、監督賞、主演男優賞、照明賞を受賞し、東京国際映画祭、トリノ映画祭など多くの国際映画祭でも評価された。監督は団地の小犬連続失踪事件を題材にしたコメディ『ほえる犬は噛まない』で昨年話題となったボン・ジュノであり、主演はJSAで独特の存在感を示した韓国を代表する俳優ソン・ガンホと新鋭キム・サンギョンである。

映画は1986年ソウル近郊の農村で若い女性の裸死体が発見されるシーンから始まる。彼女は無惨にも手足を拘束のうえ強姦されており、同じ手口の殺人事件が繰り返される。現地には特別捜査本部が設置され、地元の刑事パク・トゥマン（ソン・ガンホ）とソウル市警から派遣されたソ・テユン（キム・サンギョン）がこの難事件に挑む。パク刑事はたたき上げであり、拷問もいとわぬ伝統的捜査を行ない、ソ・テユンは4年制大学を卒業した都会派であり、捜査資料を重視する近代的捜査を行なう。二人は当初対立しあうが、失敗を重ねながら互いを認め合うようになり、ついに有力容疑者ヒョンギュに行きつく。しかし、二人は証拠不十分でヒョンギュを拘束できず、決定的証拠であるDNA鑑定の結果を待つ間に、ソ刑事が捜査中知り合った女学生が殺される。ソ刑事は理性を失いヒョンギュを撃ち殺そうとするが、その時DNA鑑定の結果がパク刑事によって届けられる。しかし、その結果は予想に反したものであった。



主演の2人（左がソン・ガンホ、右がキム・サンギョン）。

『殺人の追憶』は全国上映中。

公式ホームページは (<http://www.cqn.co.jp/mom/>)。

この写真は(有)シネカノンより提供いただきました。

時が流れ、刑事を辞めたパクがファーストシーンで出てくる殺人現場を偶然訪れるが、彼のやり切れない表情がこの事件の全てを物語る。

現在、韓流がアジアを席卷しつつあり、日本でも「シュリ」の大ヒット以降、「JSA」「猟奇的な彼女」などの一部の映画がシネマコンプレックスにおいて全国規模で公開され、単館上映を含めれば、韓国映画が常に数本は上映されている状況になっている。そして、「冬のソナタ」のヒットが韓国ドラマブームを引き起こし、韓国ドラマを扱った多くの書籍が出版され、過去のヒットドラマがBS、CS、地方局を中心に放映されている。その多くはクオリティが高く、非常に楽しめるが、ハリウッド映画や日本のトレンドドラマのエッセンスを韓国風にアレンジした「よくできた複製品」との感じを否めなかった。

この作品は「迷宮入りした連続殺人」という消化しづらいテーマを逆に取り独自の解釈することによって、民主化への過渡期という当時の時代背景や翻弄される捜査官の葛藤を、ユーモアを含めながら描き、結論がでないもどかしさをメッセージとして訴えかけている。

当時の韓国は独裁政権が終わり、民主化の嵐が吹き荒れていた。私は大学院時代多くの韓国人の留学生に囲まれ（一時期日本人の私と10人前後の韓国人という構成になったこともある）、学生運

動や軍隊における経験などを聞く機会を得た。この映画は彼らから聞いた当時の時代の雰囲気と見事に符合しており、そのリアルさにおいて他の韓国映画を圧倒している。多くの韓国映画やドラマはテーマの1つとして朝鮮戦争やベトナム戦争への従軍による別れを直接的に描いているし、兵役はラブストーリーでも必須の題材となっている。しかし、そこで描かれる描写は何か薄っぺらさを感じ、この映画の間接的でありながら、リアルさを示した描写とはかけ離れている。この相違はこの映画の表現力の強さを反映しているといえる。

この映画のハードな側面ばかり述べてきたが、この映画の多くのシーンは韓国の一般的な田舎の雰囲気やそこにあふれるユーモアの描写に割かれている。その象徴がファーストシーンとラストシーンで描写される畑のど真ん中の殺害現場である。この殺害現場のシーンはこの映画が都会の一部の地域において起こりえたことではなく、多様な面で過渡期であった当時の韓国社会のどこにでも起こりえた事件であることを納得させる。そして、こうした描写が非現実である連続猟奇殺人の恐怖感を際立たせ、犯罪に対する嫌悪感や現場捜査官の葛藤に対する観客の共感を与えているのである。

この映画はテーマがテーマだけに見えて楽しさばかりを感じられる作品ではない。しかし、多くの日本映画が陥っている「説教くささ」だけが残る作品ではなく、エンターテインメント作品として十分に成立している。韓国映画は「シュリ」「JSA」などを経て国際的に通用するエンターテインメント性を十分に身に付けており、そうした段階を経たからこそ実現可能であった作品であり、私はこうした映画が興行収入1位となる韓国の映画産業をうらやましく感じる。私も昨年日本で興行収入1位となった「踊る大捜査線」は大好きな作品であるが、韓国と日本の映画産業のレベルの差と観客のスタンスの違いに愕然とした。

現在、「冬のソナタ」がNHK 地上波で放映され大ヒットしているが、「冬のソナタ」で関心を持った皆さんもぜひこの作品を見てほしい。新たな段階に達した韓国エンターテインメント産業の

現状が垣間見られるはずである。

「冬ソナ」と韓国大衆文化開放

現代中国学部

藤森 猛

韓国の大衆文化開放

1998年10月のキム・テジュン（김대중）大統領によって始められた第一次「日本文化の開放」が2004年には第四次開放の段階に至り、日本の映画・ビデオ・出版・歌謡曲・アニメーション・演劇などの大衆芸術文化が次々と韓国において一般公開されることになった。同時に韓国からも映画・歌謡曲・テレビドラマなどの多くの作品が日本に流入し、日本をはじめ中国・台湾・東南アジアなど多くの地域で「韓流」と呼ばれる韓国の大衆文化の一大ブームが起こっている。

まず映画においては、93年『風の丘を越えて』（서편제）の公開に始まり、『八月のクリスマス』（8월의 크리스마스）、『シュリ』（쉬리）、『接続』（접속）、『JSA』、『友へ チング』（친구）、『春香伝』（춘향전）などの作品の公開で、韓国映画作品の大ヒットが続いている。言うまでもなく、2002年の日韓W杯（ワールドカップ）開催が日本における韓国ブームに火をつける契機となっている。

一方、ドラマにおいては、日本における2003年からの『冬のソナタ』（겨울연가）のNHK放映が契機となり、熱狂的な韓国ブームが引き起こされ、2004年4月、主演男優のペ・ヨンジュン（배